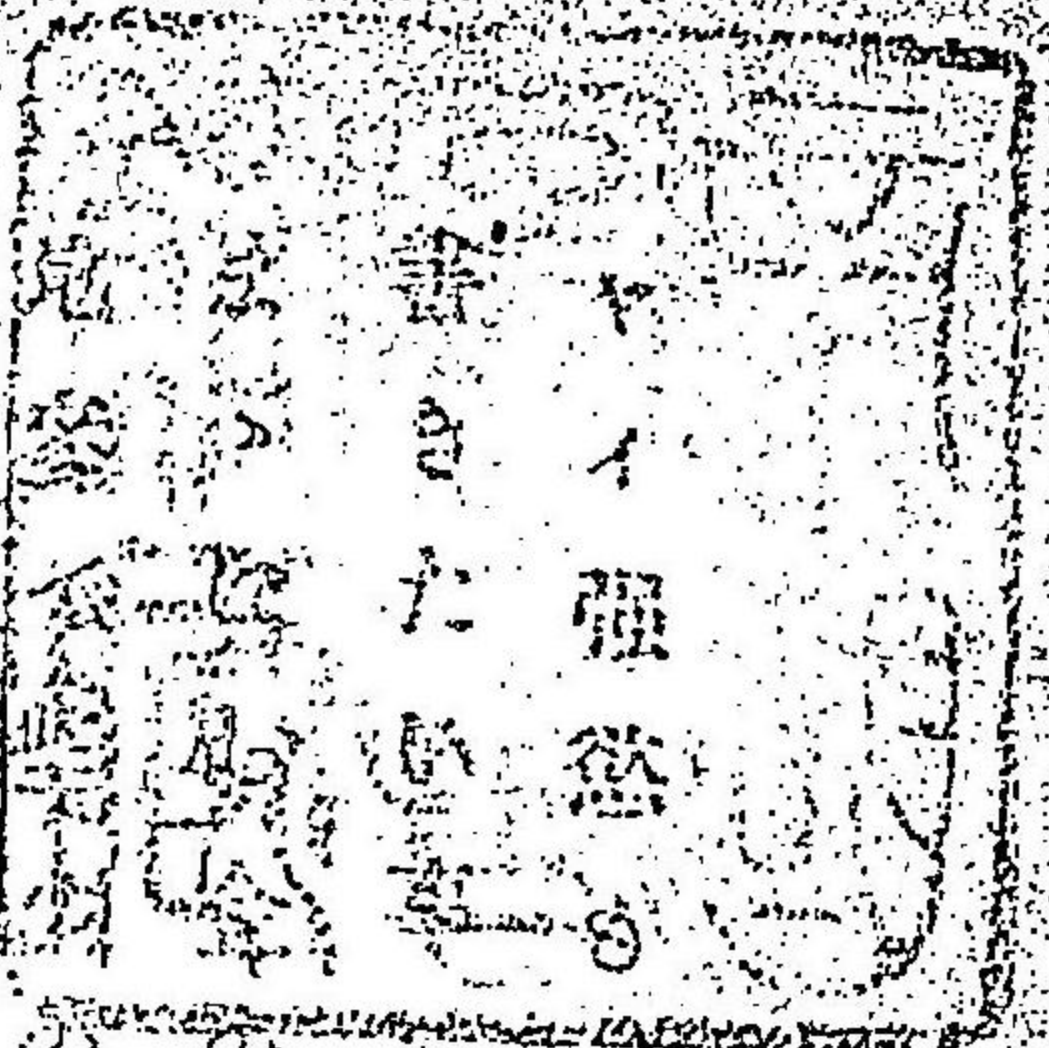


特 72
119

はしをかき



ヤイ強慾のめお金かほしくは何故筆探らぬ
 書きたい事を何なりと並べて得させど、のため
 まかど心持の手前ハイとは言へどやつが、れが、初
 地蔵の間の間がな隙がな、酒呑む代と引きか
 へて露の命を古筆に墨も缺片の硯に向ひ、恥も慮
 外も眷顧す、御購請奉願る、拙なき文のはづかしさ
 萬一と世間の諸君に御氣に叶いし報にて、二世の
 妻も飯やられ泣き顔ををしのお鳥目、それがはし
 にやとコレ此の死靈と生靈書たが漸う百と餘へ
 一と子を持つてゐる親は猶更爺様婆さま公候伯子男

明治
 27 4 7
 肉交

の御族は士農工商階級となく、幕府の御者はいじらしき不慮とわはる。我はりて、下々の御購讀を賜はらば、此は御族の御しつ時多しつの大徳傳と、そんじよ、御族の御をそのまゝと。

山邊松軒著

山邊松軒著

小説死靈と生靈

山の邊松軒著

(壹)

常例も患者は診察時間前より詰かけ、然しも廣やかなる患者控室も殆ど立錘の餘地なきぐらい、で、また藥取の衆も藥局に充滿して互に我先を争いし程なる赤坂福井町の萬全堂醫院も、怎いふものか近來目際患者を減じ、淋れ反つて疊日の形跡をとゞめず、定得意の八百屋から米屋までが小首を傾ける程の現状、で、随つて車夫の能公も殆ど無用に苦み、大の字形となつて御供錢の減少を零し居る始末、次にまた書生部屋に至つては、二人の書生

「代診先生」が鼎座を作り、朝來の恍惚話も茲に一頓挫を來せしと見へ、紙巻煙草の死骸を火鉢に堆積くしての大噫、やまた話頭は轉じて先生の臆評に移りぬ。
竹林代診「怎も當院も此節の狀体では殆ど閑散に苦む子エ、と云つて明て散歩と洒落出す事も出來ず、兎角人間の體も餘り忙し過ても困るが、と云つてまた閑過ぎても困るもので、俗諺にも能く言ふ、人は貧窮でも困るが扱てまた有福過ても困るツて言ふと同一般で、たどへ繁閑敢て關せざる所の手當を領る我々の身として、兩者其の何れかを採と云ふ段になるこ、矢張忙しくて困ると云ふ方の口たて。

「書生敷田」イヤ最う實に竹林君の言はるゝ通りた子エ

實に憎むべきは島子夫人の行爲、夫人の乱行一と度新紙に晒さるゝや、忽ち導火線となつて斯の如き頽廢を來すのみならず、其の耻辱の幾分は曳て我輩等にも波及し、近隣其他知己朋友間に至る迄も自然面僕を失するの感ありて、畢竟未來の學士を以て任ずる我々が前途の進行上よ一大打撃を加へられたも全然已に今、現に貴重なる時日を此の徒言に弄し、書籍を繙くの勇氣を阻喪せしめたるも此れ皆彼れ淫奔なる島子夫人の行動に基因せざるなし、でまた先生もだ妻女の不徳に因つて社會に信用を殺がれ、殊に同業者間に羨望せられし程の醫院が、可憐門前草を生ぜしめんとするの悲境、實に此れ一犬吠て萬犬此れに和すると全然新聞の効力も亦偉大なりといふ

へした子エ、だが併し人の噂も七十五日で、何れ此の衰
 運を挽回するの機も在るふが、流石磊落の先生も今回の
 出来事に付いては日頃の氣象何處にやら、去つて鬱々離
 座敷の病床、退ぞいて熟々考ふれば、苦樂は友白髮迄さ
 確信したる妻女の心底、鏗鏘反れて意外の不行跡を演じ
 所謂馬の足たる緞帳俳優と手を採て今に其行方を知らず
 先生の心中煩悶の程度また察すべしだ子エ、先づお互に
 將來妻を娶るにしてもた、宜敷此れ等に鑒みて斷じて花
 柳の巷より選譯すべからずた子エ、怎た君。
 書生春野「有りや成程敷田君の言ふ通り、今回當院を
 まて衰運に陥入らしめたも、一として島子夫人れ乱行に
 基因せざるはなし、たか併し今更考へて見るこ、先生に

於ても随分不法可憐な行爲が在つた様子だから、僕は這
 般當醫院の失體を來したるは、先生に於て自業自得この
 斷案を下すに躊躇しない子エ、先づ聽たまへ、實は君等
 にも未だ話さなれたが斯ふいふ事があつたて、忘れもし
 ない十月の七八日頃であつたが、君等は他出して僕一人
 立關番の任を全うして居ると、午後の四時頃で、もある
 うか、年頃二十七八ぐらいの丸髻に結つた女が、片手に
 小さな風呂敷包を提て、二歳ばかりの赤坊を背負、秋風
 冷やかに袖を掃ひ世間己に袷に袷羽織を被着の時期に當
 り、洗ひ晒して色退たる紺飛白の單衣一枚を着け、故の
 後齒を評するも敢て誣言とらざるの下駄を支かけ、頗る
 身窄らしい粉裝でこそあれ、色白で生際も揃い黒目勝の

眼に穂長の眼毛で、眼尻の少し釣り上つた處などは聊
慳相に見受らるゝものゝ、併し此れは其の口許の愛くる
しい處から見るも、永らく胸中に憂苦煩悶する事在つて
の決果、自然天然の間に化し來つたものとわ、誰が眼に
も察するに難からざるところ、で其女が家の表を五六回
も北に南に彷徨つた末、漸のこゝで怯怖しながら入り來
り、尤も叮嚀に挨拶をなしたるの後、先生の在不在を問
ふから、不在の實を以て答た、するに除に口を開いて曰
くだネエ。
何も御存知のない貴郎へ、此麼身窄らしい身装あがつて
此様な事を御伺い申も可疑はしうわ御座りますか。此家
の旦那様は、今に御一人てお在になりますか。

と斯う聞んたらう、で此家は病院組織じやないので、各
専門の醫師が何人も勤て居る了であらぬ、此れは醫學士
横江延藏先生個人の醫院で、診察に従事するは先生と代
診の二人のみ、であるが常例も午後ハ往診と規定してあ
るので、今一寸生憎ですが一体甚麼御病氣ですかと聞と。
イエ、實は御診察を受に參つた了であらぬ御座りませぬが、
つい粗急な御伺い様致しましたものですから、怎も飛た
失禮仕まして、實は私の御伺い申ましたのはそのなんで
御座りますあ、此家の旦那様には未たお孤獨で在住て、
奥様はお娶になりませんのですか、此様に尋申上ま
したので。

斯う言うんたらうハ、ナ些少變たわい妙な事を聞くと思

つた、が、併し見受る所まさか狂印しでもなさ爾うだし
 何も隠したてするの必要がないと、ハア先生ですか先生
 は當院開業前より立派な奥さんが在りますかと答へた、
 するごヒエー……………と反返つて。

「竹林」ア痛ア痛じやない熱い、オー熱いと頬を押へな
 がら、酷い事をするじやないか君、其様に大做に手眞似
 までしないでも了るよ、巻煙草の火を此處へ付てさ見た
 まへ火脹になつたせ、酷いなめ眞實に。

「春田」イヤ失敬々々でも君其時の驚き様つたらなかつ
 た子エ、とても席亭や演劇などで見の比にあらずで又最
 も其もその筈さ實地に演じるんだもの、實に君其時の現
 状などは到底僕の訥辨或は手眞似ぐらいでわ其形容の幾

分をも満足に物語る事は出辨ん子エ、で其の見張つた眼
 に少しく血を走らせて太息をつき身を震はせて恨めしさ
 うに奥の方を覗き込み、血の氣のない唇を惴々と動めか
 し聴て身をにじり寄せて我輩の顔を見詰ながら斯う語り
 たした子エ。

何も貴郎に斯う申んでは御座りませぬが、怎ぞまあ一と
 通りお聞き下さりませ、何をお隠し申ませう元私は信州
 伊那の生れ、實は此の家の主人横江延藏が妻の花と申す
 もので、イエ決してお門違なぞでわ御座りませぬ、一体
 此の三年前且那が東京へお出なさる時おつしやるのには、
 兎にかく開業次第に呼び寄せることにしようが、なんせ
 おまへは未だ東京は、はじめのころでもあり、多ぶん

迎への者を遣す事にしようが、萬一亦手紙で言つて寄越したならば、彼の權兵衛爺にでも送つて貰う事にするさ。ごお別れ致しましたが、最う其の頃より月のものも閉り、其後今か今かとお待ち申間に月満て生み落しましたのが此兒でござりまして、と涙ながら物語つて居ると、此話と島子夫人は障子越しにでも聞いて居たものと見へ、彼の瘦剛な顔に青筋を現し、成田屋其方退けの眼を剝ぎ出して、眼尻を釣上げ柳眉を逆立て、足音荒々しく現れ來り、卷舌まじりの剛面で突唐に斯うさ君。ぜ、全體なんだ其處に居るのわ、氣狂たか乞食だが、今も影で聞いて居りやあ、言いたい三味な寐言を言つてさ、オイお乞食さんへ、罰が當つて口が曲るよ、譬へ虚偽に

もせよ其形貌でさ、醫學士横江延藏先生の妻で候のなんのツて、何處を押して其様な熱を吹くんたらう、マア考へてと覽よ、勿体至極もないじやないか、子、其の子供までも先生の子だなんてサ、それも家の人が安名だとか何とかいふんなら、狐の所爲で葛の葉の現ない限りもあるまいが、お生憎さま醫學士の横江先生だからね、能くで覽よ、此れ、此處に島子様といふ奥さんがチャント一人着て居んだよ、子、了つたらう、了つたら早々とお歸りよ、エ、雨模様だから躊躇して居りや寺の椽の下が大入で席がなくなるよ、オイ春田、おまへ全体此塵な者を揚るのが仰々の間違た、直ぐに擲出しておしまいよ、と言い乍ら女の膝頭を蹴飛して其儘退込んだが、扱また其の

跡たて、女は蹴られて橙と願れる、背の赤坊は魂消て泣
出すと云ふ始末で、其の淳朴可憐なりし女も、事爰に至
るや忽然として眉間に八字を現出し、血眼に無念の熱涙
を浮かべ、齒をくい縛り眼を瞋らして奥を睨めは、時恰
も晩餐の膳立最中で、ガタゴトくの音と、アハ、ウ
フ、と冷笑の聲和して聞ゆるのみサ。
で女は小供の泣に感付ず暫時睨んだ儘でありしが、須臾
氣付いて立上り赤坊のお尻を敲きながら、什麼も貴耶に
こそとんだ御迷惑を、心乱れた折柄ながら感謝の涙と
共に、頗る懇懃に挨拶をして、イエ最う此れ限り伺いま
せんから、今の方に宜敷爾う申して下さいつて、啜り泣
しながら萎々と出かけたが、其の敷居を跨ぐ際にのぞみ。

今に見ろ崇た………どの話を幻
微に漏したて、最う其の際ハ日ハ暮かり雨はポツリポ
ツリと降はじめたのれ、可哀そうに傘もなく、愍然氣な
る小供を憐恤るヨイヨイの聲と共に、姿は濛々たる闇霧
の間に掻き消されたが子、其れが氣の故でもあるのり、
また表にでも彷徨んで居つたものやら、須臾一としきり
大降となつてうらも、怎も雨風の音の中に赤坊の泣聲か
混交つて聞こゆる容な氣がして、些こ僕は神經過敏の質
であるので、折角眠り付かうとしたのに、一度其の聲
を耳にしたが最後、もう眼がハツチリ涙で、夜も終ら目
蕩むことを得ず、再度も其の際の現状は眼前に畫出せら
れて、所謂人の疝氣を頭痛的であるもの、本件に對

して僕は認定裁判を下したがり、君等は倍席或は檢察官の位置として、僕に於ける臆測判断の適否を評してくれ給へ。

まづ尋て來た其の阿花さか云ふ女を捉へて原告とし、家の島子夫人を以つて被告に疑し、先生は利害關係人即ち第三者として、茲に公判を開くとしてた、第一原告たる阿花の性行を案ずるに、其の田舎訛りの言葉つき、淳朴たるの風採、紛裝こそ身窄らしこ雖も何處となく奥懐しき体度、其他怨恨を呑んで多辨を吐かざる所なごの事實に徴するも、豈夫架空の言語を構造して強請がまじき舉動あるべきものにあらず、慥に縁故あつて、否縁故も縁故、然も其の彼女が訴ふる如く、先生の郷里に在りし當

時、未來は夫たり妻たりなごの艶語を用ゐ、大いに慾望を満たしたものと認めゆる子エ。

で、また第二は被告たる島子夫人の素行だて、成程縹緲は十人並列ても、確に中の二三番、正に研媚たるの名稱にこそ背向ざるも、萬般の動作盡悉く輕佻に走り、綺言頗る勉むと雖も自然野鄙を表し、以前花柳の巷に不見轉を甘んじたるの風采は、歴々として誰が眼にも映ずる所、到底學士夫人の品格を保たざるもの、で、彼女の來た際もた、そりや女性の慣例として嫉妬の念勃起にもせよ、其處は玄關番たる我輩の責任として、是非曲直の如何を問はず、臨機應變の所置を施すべきのに、我が身の位置をも願見す自身出娑婆つて罵詈雑言、以つて單に追ッ拂

ひ 專一の策を採る所なごから見るに、夫人も正に従前より彼女の身の上を知悉すると雖も、空惚平然知らざるを假装し、依つて以つて一時を彌縫せんとするに出しものご認定するの他なし。

次に又九第三者たる先生の素行に付いては、以前は感知らず、右に左く我輩當院に寄食の身となつて以来、未だ曾て行爲上一として咎むべきの点なきも、彼の今業平的の顔に義髯を生蓄た工合、目元及び口元に滴るゝ愛嬌、生殺自在とも言ふべき爽快なる辨舌を有する所などに因つて察するも、必ずや幾多の婦女を苦惱せしめたに相違ない、先づ此れ等の点より臆測するよ、彼れお花女の如きも其術中に陥入り、頗る憂苦せしめられたる等の事の

如きは、明々瞭々として敢て難きにあらずと、考へ去り考へ來り遂に前述の如き決定を與へた。

サテ胸間斯う決定が付いてからだて、増々彼女の言に信を置ようになり、やも先生も能々の被爲かた、然も其の戀に花が咲き、計つて二歳と云ふ實まで結んだのに、其れなりけりに音信不通とは、薄情も亦極れりと云ふの行爲、ヨシ一番夫人の譴責を甘んじ、駈出して探し來らんかなどと枕を欷て或は寢返り、惘然といふ感念に驅れて、其の晩は目蕩みもせで遂東天の白む迄さ、エ、什麼た君「竹林」なる程君の話の模様より察すれば、事實と認むるの他ない子エ、だが併し、其れぐらいの出來事をさ、お互の間柄として今日まで猫糞に附するは酷いじやないか

君。

「春田」でも君、僕のお饒舌が今日迄口を開かざるには、大いに原因の存るありさ、實は其際僕が門前拂いを喰せなかつたとして、イヤハヤ夫人の立腹つたら非常なもんぞ、人の見解のないにも程がある、また第一彼塵者と口を交れが抑々の間違だ、一睨の下に追ッ拂へば何の事は無いのに、お前へ何の爲の玄關番た、エ、考て御覧なぞと、それは、種々の文句を並列した未が、先生及び君等にも斷じて漏洩せぬ事、また彼女再度尋ねるも期して追拂の任を全うせる事の二條件で、漸く妥協は成立したもので、君、彼の眼を剥出し其の視線を應用して、誰に依つて衣食を安ずるかど、恩意的を暗々裡に示すでわないか、で

萬々一君等に漏洩したるの決果、解雇の嚴命にでも接するあらば、忽ち鼻下喰ふ點の死活問題が持上る仕儀たら、此の多辨を以つて誇る我輩も、殆んど唾を呑で今日まで猫糞と云ふ次第サ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

「藪田」怎たまあ、躰に似合ねえ意氣地なしじやないか併し其の嚇し文句を寄食の爲に謹守する所なぞは、柄に無い可愛氣がある子エ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

下先生の服薬は何たね。

「竹林」最初の間は先生自身で調劑して居つたから分らんが、此の頃ぞわ、臭素加留謨四〇に、キミカ丁幾二〇と、苦味丁幾四〇に、溜水二〇〇を加へて服つて居るで、餘り憂苦煩悶の決果、腦に異狀を來したと見ゆるよ、

でまさ時適眠られんこみゆて、ズルフオナールを二〇つ
と用ゆるて。

「藪田」また最も眠られんのは無理はないさ、生死はお
ろか二世迄ご契つた掌中の珠が、浮草や今日は向ふの岸
に咲くと来ちやネエ 晩秋の長夜蠹日の寢室暖きを畫き
考へ去り考へ来れば、轉失望措く不能たろうさ、ハ、ハ、
など、各自の評論續出其の止むる所を知らず、此れ萬全
堂醫院書生部屋の現状。
で、また次ぎ八疊の仲の間には、仲働きの阿仲、下女お
鍋と火鉢を中に差向ひ、乙甲殆んど檢定に苦む非凡なる
大臂を据へて盤石の如く、世間既に定評ある已惚と瘡氣
は、正に此れ等下婢にも存在すると見ゆ、太神樂以上と

も謂ふべき獅子鼻を蠢かし、及ばぬ戀の瀧登りなる名題
俳優の可否を叩き、夢中になつて袂より火の燃へ上るを
知らず、此の火災に於ける發見者兼先着第一の消防手と
して駈付たる、書生の春田は近來の大功名。
其の奥座敷を椽側づたいに離座敷の八疊には、平常も洒
々落落々暢氣一點張ともいふべき、當院主醫學士横江延藏
如何いふものやら十月の中頃以來、其の快濶の氣風はガ
ラリ變じて陰鬱に陥入り、爾來院務を代診に一任し、漂
然去つて大磯に精養を試みつゝ在るの折柄、全月二十三
日、前八時未だ就幕中、自宅よりの電報に接し、開き見
れば豈計らん。
サクヤフシンタシユツノママ、イマダカヘラズ、オンチ

へイツタカヘン。タケバヤシ
こある此の意外なる受信に、
方に配り、東奔西走搜索に従事するの間、
某々二三の新聞は、驚く可き精細なる探訪を遂げ、
四日の三面第一段に於いて、醫學士夫人の亂行を題し、
人の素性及び行動、其他當時演技座興行中なりし俳優の
關係まで、其の洗ひ浚いを索波拔かれ、さらでたに憂
鬱厭世の氣味なりし横江は、爾來更に苦惱煩悶の程度を
加へ、爰に看護婦の擁護を受けて病蓐殆んど二ヶ月、此
れ萬金堂醫院全體に於ける目下の現狀である。

(貳)

中央氣象臺の天氣豫報に於ける地方の適否は感知らず、其
の東京の部に於ては善く的中するを得て、朝來風は眠り
て空は一面にかき曇り、ポツリポツリと降り出したる雨
は、須臾變じて雪となり、翻片として咫尺も辨ぜざる程
の大降り、で最う午后には三年以來この銘打たれぬ。
實に世は種々なもので、什麼も此の風景は、植半樓上
に銀世界を賞するもの、テモ此の雪は、天を睨み、被替
のない半纏まで、脱ぎて質屋に僅少の付直を争ひ、子供
ばかりは止むを得ず、夫婦互ひに一椀を節するもの、本
年も此の調子では二割増しは確たろう、なご、今から秋
の收穫を豫想して、お炬燵の上に酒汲かわす農家もある
たろうと察せらるゝ程の大雪なので。然無きたに閑散に

苦む例の萬全堂醫院は、雪を片付けある所で僅に明家たらざるを示すくらい、で、門前二の字を朧氣に印しあるは、此れ下女のお鍋が必要欠くべからざる買物の爲で、藥局では朝來頓服藥の紙一枚も使用せざるの始末、また書生部屋では火鉢を圍み噫こシガを交混に噴いて居る所へ、威勢よく綱引人力車を挽き入れしは、患者と思ひの外、先生の親友醫學士西野洋三郎。如何です矢張相替らずかね、この挨拶で書生の案内をも待たず、勝手知つたる離に通リ、障子スラリと引き開くれば、時しも横江は熟睡最中、で、此の間を利用して醫籍を緋き在りし看護婦の春子は、直に立つて懇慫に此れを迎へぬ。

西野は無遠慮に、座を桐洞火鉢の前に占め、ポケットより巻煙草を取り出しながら、萬一安眠を妨害してはこ氣遣いつつ、密やかに口を開いて春子に向ひ、遂忙しさに取り紛れて大いに無沙汰をしたが、近頃の工合は如何なですか。

「春子」ハイ日外御訪問下さつた時、熱度や脈搏等には體して變りはありませんが、神經の衰弱と過敏が増々募る容に見受ますので、先生に御容躰をお伺ひ申まするご、御自身では別に變らんごは仰しやりますが、時適覽吟されあそばしたり、また折々浮語を仰しやる所などは餘つほど變なんですから、實は竹林さんごも御相談を致しまして、貴先生に御來車を願つた方が宜いたろうご、家

の先生にお伺ひしますと、イヤ決して構わぬと斷じて御謝絶なさるんです、尤も其れが御素人で被在つらやれば、無理にも御勸告め申す所ですが、何にを申すにも貴先生方ご御同窓で、醫師道の泰斗で被在つしやるもんですから、なにも妾々風情が是非ご強勸申す譯にもまいりませず、特に人様に面會するさへお厭いなさる事でもあり、旁々其の儘に致して置きましたものゝ、何うも御容子が變ですから、爾の後の病狀經過を日記にして置きました、悪筆で御了り悪くは御座りますれど、ほんの御参考までに御覽下さりまして何卒。

「西野」ハ、仲々叮嚀にお記載ですなあ、成程……

一月十四日、体温三十九度脈搏九十五、食欲進まずとて

僧に雞肉ソップ二合を飲用せしのみ。

同十五日、熱度稍下り終日三十八度より同五分の間を昇降して脈搏は八十、然れども陰鬱苦惱の狀は前日と異らず、食事は牛乳三合に粥二碗。

同十六日、此日朝來熱度騰つて三十九度八分を示し脈搏は九十、然して薄暮より懊惱殊に甚しく見受られ、夜に入りては屢々唸吟され、或は忽然羣を掃ひ正座して人に詫入るの容姿をなし、また浮語にお花お花と叫び、其の煩悶の狀見るに忍びず、依つてブルフォナル一〇を進呈めて漸く平穩に歸するを得たり。

同十七日、体温三十八度五分脈搏九十にして食欲や進み、ビスケット及び滋養流動物を飲用す、而して此の日

より看護服を着るなご命せらる。
 同十八日、体温三十九度脈搏九十八、飲食物は前日と略
 同断然れども全夜二更の頃ほい、突然物凄き聲に深
 たる寂寞は破られ、戸外に人あり我を狙ふと絶叫せらる
 依つて愉快開き見れば弦月下て大空に懸り、微風除に庭
 松を揺ぐ在るのみにして、即ち此れ先生の夢想に過ぎ
 ざりき。
 同十九日、体温脈搏其の他苦惱の状前日と大差なし、夜
 に入りてより数々恐夢に魘はれたるの状を見受く。
 同二十日、体温三十八度五分脈搏九十にして、氣色聊か
 能く且晝夜とも安眠せられたり。
 感々呼……なる程變ですなあ、で、今日も引き

續いて神経は平穩ですか。
 「春子」ハイ御覽下さる通りで、昨日からは安眠と云ふ
 より寧混睡といふ有状ですが、全休御病名は何んといふ
 んで御座りませうか。
 「西野」爾うですなあ、まづ女のヒステリーと云ふやう
 な工合で、矢張りヒポコンデリーの烈しいんでしようよ
 で當時の服薬は何にをお用ゐですか。
 「春子」ハイ先頃迄は、臭曹三グラムと、苦丁四グラム
 に、溜水二百グラムを加へて御服用でしたが、最う此の
 五六日はスツカリ廢薬なさつて、什麼お勸呈申上まして
 も一向お飲用になりませんが、單た眠られんぞお苦みあ
 そばす時には、ブルフォナール一グラムをお飲りになつ

たり、或はコルラールーガラムをお服用なさるばかりで
す。
「西野」フ、ムム神経たな、困つたもんだ、ドラ起して
少し慰めてやろう。

(三)

熟く眠り居る者は徐々に起すの法により、西野に揺り起
されたる横江は、まづ背延びに次で欠氣一こつを吐き眼
を擦りながら西野の枕邊にあるを見て、イヤ君か、可く
訪つてくれた、實は明日あたり来て貰はふか、或は僕の
方から伺つてなご、是非遇つて話したい事があつたに、恰

度よかつた、あの春子さん葡萄酒を持って来て下さらん
か。

「西野」イヤ君決して構い給うな、ナニ興奮用、じゃ可
いたろう飲りたまへ、飲つて些少元氣を回復しなけりや
否れいじやないか、エ君、それや成る程翠帳紅圍の中に
共白髪までと契つた妻が、あ、云ふ不始末を仕出來して
みまば、腹も斷さうし、また残念でもあらう、無理はな
い、其れは察しる、何處までも察するもの、併し君、婦
女子なら感知らず苟くも男子、否男子も男子然も君の如
き豪放洒落を以つて任ずる男子がさ、右に左く一旦家出
したる、其の瑕瑾ある所の婦人を追想して、小心抑々神
經を惱ますさは、君の君たる所以に恥るじやないか、デ

モなた此れがたネエ、六十の坂を越したるの曉さかいふ
んならば、候補の選抜に苦むと云ふ次第もあろうが、こ
ころが人世盛中の盛たる年輩のみならず、角帽で勉學し
たるの決果、現に學士といふ花を咲して居りながら、何
んの惴々する事があるものか、我が日本國少なりと雖も
五千萬の人口を有し、東京亦狭しと云ふも百七十萬の人
口あるあり、候補の選定何んぞ苦むに足らんやたろう、ハ
ハハハ。イヤサ戯談でなく僕が全責任を帯びて、君が奪
はれし掌中の珠より層一層冠たる、面は小町的にして婢
娟の文字に背向かず、心情は時姬的にして事ふるに厚さ
と云ふ、完全無缺にして學士婦人相當なのをお媒介しよ
うから、敢て君失望落膽すべからずさ、オヤ春子さん何

時の間にか来て聽いて居つた子、ハハハハハハ。じゃ僕
も興奮劑としてか、戴かう戴かう遠慮なしに、オットト
…………… 澤山澤山。
横江「僕も御蔭様に昨日から気分が大分快方に向つた
から、今日はポツポツとお交飲をしようで、多量飲つて
くれ給へ君。

西野「爾うか、じゃあ大いに飲ろうが、併し君、其れ
じゃ餘り現金通りやしないか、候補の話しを仕たら直ぐ
斯う來るからな、ハハハハハハ。イヤ戯談は戯談とし
て君、眞實に氣を快活に持たなくちや否ないぜ。
横江「そりや成る程僕が一之間へ閉ぢ籠つて、居常鬱
々苦惱煩悶たるの現状を傍觀しての臆測では、必ずや愚

妻の亂行を残念がつての決果たろう、あご察するでも
あろうし又尤も無理もない、が併し所が大違ひで、この
延藏の憂苦煩悶するの原因は、仲々爾んな輕々たる一少
事ではない、而も人世最も慎重すべき、其の人倫五常の
道を没落するのみならば未たしもこして、僕は實に恐る
べき殺人の大罪を犯してある、けれども其れが直接に手
を下したと云ふ譯ではないので、今日迄刑法の制裁こそ
受けざれ、道徳上に於ける重罪の刑は免れず、則ち數月
來此の一室に閉ぢ籠つて苦惱煩悶措く能はざりしは、此
れ刑法上鐵窓の下に拘留せられたるも同然、此の間に在
つて我が良心に於ける豫審の決定は愈々重罪と與へられ
しも、從來の行動上に於ける檢證調書及び、其の他の條

理完全にして缺くるなく、敢て抗告するの餘地があいの
で、遂に一昨日を以つて胸中の法定に公判は開かれ、其
決果我が所爲に於ける證憑充分なるのみならず、隨つて
檢事の論告も亦當を得て間然する所なく、其宣告は刑法
第二百九十五條を適用して死刑に處すとの判決でありき
然れ共既往に遡つて回顧すれば、此れ正に道徳上に於け
る社會の制裁は斯くあるべしとは、自信して疑はざる所
なるを以つて、控訴上告の必要を認ず、で、今後單た甘
んじて絞首臺の露と消るを待つのみさ。
西野「なんと馬鹿々々しい、眞面目になつて話すから
無言つて聽いて居りや、惚氣話とは驚いた子エ、そりや
成る程君の業平的の顔を以つてしたら、今君の言ふか如

朝来シトシトと降り頻る雪のため、あはれ操を破られん
ごすれば、其處は殺す神あれば救くる佛ありとの古諺に
漏す、朔風適々來つて此れを掃ひ去る音の他、道行人の
跫音や轍の音も更になく、世間恰も水を撒つたるが如き
松月二十一日の夜、賓客西野は云ふまでもなく、其の他
代診竹林以下看護婦に至る迄、肅々として離座敷の一室
に集いたるの折柄、頃日になき沈着の態度を以つて尊上
に黙座して在りし横江は、まづ其の飲みかけの葡萄酒を
傾飲たるの後、徐々に口を開き語尾に干釣の力を入れて
斯う譚り出したのである。
扱今夜君方に聽て戴きたいのは、實は他事ではない此の
横江延藏が胸中に今日まで蟠まつて居つた所の、其の疑

惑の一塊を、今君方の眼前で自身舌刀を取り將來の参考
として精細に解剖をするから、宜く耳を傾けて謹聽を願
いたい。
現今社會は二十世紀と云ふ文明を迎へ、日進月歩の趨勢
を以つて新智識の發達するのは、實に吾人の幸福此れよ
り大なるはない、たが併し其の進歩と伴なつては困る物
も、矢張り同速力を以つて進行するの傾向がある、で其
の物は何かと云へば、即ち不の字冠きの道德なので、其
様事は此の淺學短才の延藏が言ふまでもなく、既に裁判
所に於ける取扱ひ件数が、年一年増殖する所が證して明
で在る、あれども此れ等は律法の裁決に據るから未だし
もこして、其の法律の制裁を加ふる事能はざるの隱惡即

ち間接にして人を死地に陥落せしむる罪業の如きは、先づ罪中の罪の極と云はざるを得んやたらう、而して此れ等の悪徳を侵しつゝあるの徒輩、其の多くは中流以上の非面似動物に在りては、社會の前途誠に杞憂に耐へざるに在らずや、現に今此處に饒舌りつゝある此の延藏の如きは、即ち其の不徳者中の最も酷の冠たる者で、今更考ふれば實に勿体ない次第ではあるが、其の極悪非道を學士と云ふ錦囊に包み、今日まで洒々落落社會を瞞着して在りしは、西野君は云ふまでもなく、一家に同棲して居る君等ですらも知るまい、が併し人盛んなれば神も祟らずとやら云ふ如く、昨晚秋までは無事安穩の生活を得しも、或る不圖した事情在つて以來は、良心の鬼に責め立

てられ、我が身からなる夜る晝なしの針の山、其の折檻に堪られず、爰に始めて悟りを展いたので、萬一も此の懺悔物語りが、僥倖にして未來に於ける衆生濟度の一端ともならば、或は亡者の………、ドラ最う一杯飲つて………。

實に世の中は、十人十色百人百種で在つて、お互に斯う目口鼻耳舌の五官を具備こそすれ、其中には大あり小あり善あり悪あると一般で、此の延藏も西野君は袂を連ねて同角帽を冠り、而して譬お情にもせよ、右に左く學士と云ふ名譽の肩書を有しながら、其の心に至つては西野君は雪と炭、月と鼈、即ち霄壤の大差ありで、西野君は善中の善、此の延藏は悪中の大悪、然るに其の悪を

秘する巧にして、君の如き善人と實懇にするのみならず、
學士として上流社會にも珍重され、敢て今日まで其の惡
徳を看破せられざりしは、此れ所謂内心夜叉の最も猛惡
なるものではあるまいか。
抑々此の延藏の穢しつゝある學士の肩書は、不仁、不義
不孝、不徳、不正、不届、不深切の不の字盡しで有卦に
入つて得たるの學士で、最う其の大体からして異なつて
居るのた、實は何にを匿そう、元僕は信州伊那郡春雨村
の名主冬野寒三郎の二男で、未だ僕が母の胎内に蠢めい
て居つた當時は、顎の命令宜く百姓を左右し頗る時運で
居つたも、有爲轉變の世の中は、計らざりき維新の革命
穢多も非人も雜居の明治となつてからは、家政日を追つ

て非運に傾向て今の現状、こは親父が冬の夜長の物語り
でも未だ其の頃は、表の長屋門も依然として居り、米も
購はない御蔭に、土地の學校も故障なく仕上、猶親父が
我が身の方向を氣遣つて、附近の漢法醫高田耕齋氏に託
されて、其處に學ぶこと二年と幾旬、で少しく斯道の下
地を経験したるの後、出京して濟生學舎へ這入つたのは
確明治十八年の四月頃であつた、で爾來湯島四丁目の或
る下宿に割據して、通學する事三冬三夏、以つて漸く前
期の免狀、領つた其の年の秋であつた、父危篤直ぐ歸れ
この電報に接し、忽惶旅装を調べ歸つて見れば豈計らん
意外意外實に意外、で其の意外は他でもない自宅の變化
したので、驚くまい事が土藏や長屋門は疾うに棲み替を

して、跡には壁土沃たりとみえ莖太りたる青菜の満々たるを見るのみ、でも僥倖にして母屋は免れしと見へ、庇傾向たるのみにて未だ形骸を顔さず、尤も送金の都度家計不如意、こは書面の末文に必ず唱つてはありしも、豈夫斯う迄こは期せざりしに、實に轉劇なきの世の現状じやこ、涙を呑み門を潜れば今しも母は煎薬最中で、僕の姿を見るが早い、一別以來は外方退けにして先づ父の病床へ案内されぬ、見れば兄の不可藏はじめ二三の近親枕邊に在り、乃ち一禮して父を看れば、最や體温下つて舌剛ばり言語は更、單に僅に眼を見開き其の潤みたる視線に依つて残念と示せしのみ、然して後數時遂に息切れぬ。

兄弟は他人の始まりこは、成程それに相違ない、親在ませばこそ、何様か斯様かこの無理算段、屋敷跡を菜畑にしてなご毎月の送金、所が最う其父親は黄泉の旅、其の六道の何れに彷徨ふやを知らず、で現在の兄は、人並脱れて意地悪く、でも前期まで領つたものをも人様も云ひ我も願へど、其の旅費丈すらも與へざるのみか、恁あつても鋏鎌を手にせよこの強制、と云つて自力では旅費も作れざるの境遇、止むなく虻蚊に刺れての水呑百姓、旦には山に樵、夕には天瀧に漁り、故の筆疣は岩石の如き

鐵癩に化し去り、其の一舉一動無念ならざるはなく、時
適涙を呑んで東天を睨みつゝ、冬去つて春來り夏去つて
秋を迎へ、不承不勝過す一年有半後六月であつたて、鎌
を手にしたる儘田畔に息い居つたるの際、矢張り隣れる
田に耕作し居りたる隣村の黒原某、煙管片手に腰なる煙
草を捻り乍ら僕の側へ來り、仲々宜く御稼ぎですなあ、こ
の挨拶で同芝生に腰を卸し、扱て言ふよう、中年からの
お仕込たのに可く出來ますなあ、併し農の方が氣樂の所
も在つて面白いでしょう、なんて所から話し始めて種々
な事を譚たる間、僕は滿腔の不本意も事情許さざるの由
を打明けた、するに彼の曰くたネエ、じゃあ恁です斯う
したら、こは他でもない縁談なので、其の養子を探して

居ると云ふのは、些と離隔てはおるが僕も知つて居る、舊
高遠三萬石の祿高の内、八十石を領した横江立之丞と云
ひ、兎に角デモ以上の家柄ではあり殊に内福、たが併し
又謂も在る、で其の謂くと云ふのは斯うなのである。
左様さ、何んでも安政元年甲寅の十月頃であつたとか云
ふ事であるが、未だ其の頃は徳川十二代の家定卿が將軍
職で在られた時代で、大平無事に苦む士族の輩は、單た
春は花、夏は湯治、秋は紅葉と浮れ廻るの他、何の爲す
事もなきに係はらず、一にも武士二にも武士で、理の曲
直の如何を問はず、唯武士に向つてこの一言を用ゆるあ
らば、百姓町人は米春蟬の様になつて、御無理御尤も
て通つたもの、であるから自然小供等までも親を見眞似

て、彌張り暴状を逞しふしたものと見え、其の横江立之丞が未だ十二歳ぐらいで、同年輩の小供四五人が天瀧川で釣を垂れた歸るさ、遇ある農家で飼育してありし鰻に眼が付き、寄つて集つて追廻した末其の二羽を捉へ、意氣揚々率き退んとするの刹那、飼主の認むる所となり、散々の打擲を受たごやらで、唯でさへ手に行ずの聞えある立之丞の父、横江曲左衛門いかでか此れを聞き捨にやすべき、たごえ小供にもせよ武士の性、然るを百姓風情の分際として辱めを與ふるとは、不届千萬にして實に宥すべからざるの仕儀と、直ちに小供等の親を駈り集めて復讐手段を談合しも、右左く意見は硬軟の二派に分れて遷延決せざりしかば、短氣豪慢なる曲左衛門は獨親族の者

二三の手を借り、即夜立之丞を案内に飼主の家に押寄せ、出口出口は従者に立番せしめ、自身躍り込んで手當り次第の弄り切り、遂五人の家族を惨殺して引上たこの事、で實に其の時の惨々たる悲鳴は遠近に徹し、未だ耳底を離去すごは、今以つて其の附近の一口話し、であるのに其當時は僅の謹身ぐらいでお構いなと、ごはまた何んご緩たる成敗たろう。たが併し、譬へ藩の成敗は輕きにもせよ、天や神は仲々容赦しない、で其の曲左衛門は一年後より發狂しての狂い死に、間もなく其の妻のお秀と云ふも勞症とやらで止の畢竟は剃刀の最後、遂るに續いて帶刀廢止の御布告領れてからは其の地に居るのも後目痛く、金祿引き替への

公債を握ると同時に、棲慣し屋敷も太政官紙幣と引き替
て、春野村へこの一家族の轉居、其の立之丞は無事で妻
この間に二男二女を挙げ、身は閑散なり内福ではあり、旁
々、蝶と眺め花と愛して成育つた甲斐もなく、其の總領
は二十二を一期で土と化し、二男は死期の二十で露と消
去、姉のお里は幸ひ破瓜となつて他へ嫁せしも、母の阿
秀が天刑病となつたが因で離縁され、妹阿花また厄年の
盛りを迎えしも、前段述るが如き現状なので、誰あつて
養子たらんご欲する者がなし、で今黒原の話す養子の口
ご云ふのは此れなのである、所で考へてみれば百姓も不
可は厭たが、また世間より後指を差さるゝも面白くもな
い、が併し黒原の話しも眞更でない、何にも君前期迄も

領つた者が、鉄鎌を手にして肥桶の壓こならずとも、宜
しんば何處かの藥局を手傳うご、した所で閑暇には勉強
も出来、のみならず無理に襪襪を纏はずとも、譬へ木綿
にもせよ五ツ紋の羽織を引被てさ、適に美人でも來診た
時は、ドラ一寸舌を御見せなさいつて口を開かせたり、シ
テお脈はつて手を握つて見たりの餘興もあるじやないか、
それや成る程今君に退けられたら兄は困るたらう、だが
併斯う云つちや失禮だが、君が恁麼に一緒にゐつて働い
たさて、此處四五年で別家は先づ難成いと思ふネエ、し
て見れば何うせ養子の身分ごしたら、氏や血統は言はあ
んで金に轉ぶが當世、で彼の家は多少人にも忌まれ其れ
に母親は天刑病で死没つたに相違ない、けれごも古昔か

ら癩病の系統と云ふ譯てはなし、不幸續きで随分費消つたもの、未だ併し仲々の有福で、君がそれを甘んじるならは、僕が期して御媒介申し濟生學舎の後期は愚、千葉第一高等なれ大學なれ、君の欲する所の學費は屹度支出せしむるが何うた君と、斯う云はれて見ると剛う理に落ちい話してもなし、所謂デモ農夫たる我何んの拒む所やあるべき、忽ち下話は此處に締結り、爾後黒原より相互間に數回の交渉を重ねたる末、着替一枚持あい仕儀に仕度金と準らへ貳百圓、領つたる貨幣は兄と黒原か折半分、を新耶となり濟したたのは、左様始めて國會の開かれた其の二十三年の十月であつた。

縁は奇なもの趣味なもの、とは眞に然りたネエ、なんせ僕が人に爪弾せらるゝ様な家系に、其の聳養子たるを甘んじたるの抑々さいふものは、單に學費の支給を受くるのが目的なので、まづ眼中敢て新婦なしと云ふ状であつた、が併し入つて彌い喃を言られてみるこ、其う斯う愛想なくも被爲す、殊に陰あつての陽、陽あつての陰、其の待ち凭れつゝの陰陽が紅閨中の合體に因り、何日か戀愛の牽絆は暗々裡の間に太まり、で已に翌春出京するに際し袂別する時の如きは、宛然鎌三に於ける三浦と髯鬚たりさ、イヤ全く笑つちや不可ない。

こ云ふ様な有状であつたので、養父も心中大いに満足し
たりと見え、其の與へられし學費も豫想より多く、以前
實父に頼つて出京したる時とは、左様まつ御家老と足輕
程の差、で出京して手續から入學試験も無事に済み、愈
々角帽を冠頂く事になつたのである。
去る者は日々に疎遠しこは、可く言つたもので、其の當
時こそ花の旦に五月の雨、三伏の晝に月の夕、必ず思ひ
出さるるなく、のみかは讀書中適々魂飛んで郷里に衍行
い、或は夢中に譚り合つた事もあつた、が併し今日と過
ぎ昨日と去き恰も紙を剥すが如く、何日かしたら東京灣上
を舐來る汐風や、或は鐵管の中を潜つて來る水の爲、或
は吹かれ、或は流され皆無跡形なし。

でまた其れに引き續いて忘るゝものは、咽下經過の熱
さである、なんせ以前濟生學舎に學んだ當時は、並等こ
は彼りや下宿屋のお上手、豈夫下々等とも書けざる所か
ら組合の考案、恰も汽車の客室に上等中等下等と記入し
たのを、欺待的に異名同格たる一二三等附に變更した
るも同然、で僕は即ち其の四等たる二疊の一と間に配置
せられ、寢象の悪きため時適机を蹴返し、随分隣客を驚
かした事もあつた、ごころでまた副食物たて、爾うさホ
エ、まつ銚子邊なら無論肥溜物たる鯛に甘んじ、或は口
の萎むような鹽鮭ですら舌鼓せしものが、イヤ豈夫つて
君眞實たよ、其れがさ、勿体なくも一等の六疊間を占有
し、のみならず折々いろはや常盤に駈登り、大いに手を

鳴してビールと呼びロースと叫び、其れが嵩じて北廓へ
駈ろの號令、またも募つて待合に不暇女を弄し、以前舌
打したる鹽鮭の味、又は羊羹として珍重したる焼芋の味
は、何時しか去つて巻煙草の烟と化し、風のまにまに其
の行方を知らず、と云ふ様な有状。
で今さら考へて見ると、淫慾を逞しうするの徒輩は、概
して其の多くは上流社會に在るが、なる程そりや其の筈
であるて、まあ見渡す所、凡人金錢餘つて而して後起る
の慾は食慾と色慾、此れが古昔からの通り相場である
から僕なども、前に濟生學舎に學んだ當時と雖も疾や
成年、何の春情なきやあるべき、けれども其の三年間唯
の一度婦女と戯諍たる事なく、また友人に誘はるゝと雖

も席亭に女義太を覗かず、と云ふものは他あらず即ち去
勢されて居つたので、イヤ何も去勢と云つた所を軍馬の
如く何う斯うしたのではない、單た其の懐中の金囊が去
勢せられて居るので、畢竟其の二慾を制してグウの音も
出さる始末、然るに角帽を冠り學費の供給殖ると共に、二
慾勃々と起つて其の停止まる所を知らず、で見給へ論よ
り證據を、方今の如き國事多端の折柄と雖も、新聞の三
面折々不見轉の引合に出さるゝ顔觸を、予、彼れ等も畢
竟供給過るの決果なので、今更考へて見ると此れ等の徒
輩も反省する所あつて自ら去勢し、以つて其の不生産的
の徒費を轉じて國家的事業に貢獻するあらば、浮名替り
に驍名を遺すたろうに。

西野「オイ君、病氣の身をも忘れて爾う饒舌つては不可んホエ、してまた社會の事まで慷慨したさて、其れで匡正出來得るご云ふ譯ではなしさ、先づ其れより自衛策でも講じて、お互に壽命の一年も長からんを欲すへした子エ、で先づ今晚は此れ切り何れ明晩こそするさ、子、また聴う。

横江「吁なる程、餘り話が長時間に涉つたので、定めし嫌厭たろう、けれども最前言ふ通り今夜僕の譚る所は此の延藏が空前絶後の一世一代、を今日の延藏敢て自衛策を講ずるの必要もなく、随つて死生眼中にあるでなし單た欲する所はた子エ、今夜の物語りが僥倖に諸君から傳翻せられ聊社會の参考ともならば、縦んば延藏今此處

に命を落すとも安んじて地下に瞑するを得んさ、此れ我輩一意専心切望する所、で君等も嫌ではあらうが、什麼か雪の夜物譚りとして常永へに傳へてくれ給へ、ネ、後生たから。

西野「何も君、嫌厭るの何うのこ云ふんじやないが子單た君の話中折々變な節廉が吐露るので、若しや又熱度でも騰まりはしまいかご、一寸注意はしたもの、然し其の實或は話中虚實の雜居かも知らんが、兎に角喜怒哀樂の情を俱し頗る面白いたもの、なんで嫌所か、例の代議士の口癖じやないが、本話の緊急に進行せられん事を希望して居る次第さ、ハ、ハ、ハ………否戲談じやないよ眞實にさ。

誠なき千萬言は人を動かすに足らずで、成る程此の延藏が如き、謂は不實の塊りとも云ふべき動物の口から吐たらば、或は虚實交々針小棒大の駄法螺を吹くと思はるゝかも知らんが、併し古諺にある如く人の臨終や其の言善しで、イヤ、じあなくツてもまあ譬へがサ、して見らるゝ如く今の延藏が言語及び動作上に於ては、毫も病人とは思はれんたろう、此れ即ち今回良心より勵行せられし大清潔法の施行に因り、從來我が腹中に潜伏して在りし其の不倫不道のバチルスを物の美事に撲滅し得て、今では

淨々無垢の横江延藏、で一句一言毛頭微塵の虚偽もなく亦構造でもない、と云ふ事は順次事實となつて證明して行くので、話の進行中には呼呼と叫び、ム、と感ずる様な所もなきにしもあらずだからね、何うか冷評的でなく御聽を願ひたいネエ。

所で君、そら先刻も云ふ通り、其の出京した年の暑中休暇の際などは、タツタ三月にほかならないのに、最う其の歸省の日か待ち遠で堪らず、時適暮中に指を屈して日数の打算を試み、何様たらう歸つたらば、定めし彼の顔へ満面の笑を漑へて迎へるたらうか、そまた閨中の物譚りは何様たらうか、なんて常例も理想を描き夏の短夜に睡眠時間を殺れた事もあつたものが、其の九月から十

二月までの四ヶ月間に於いて、ガラリ一變其麼念慮は何處へやら、退却かせたのは阿婆摺れ白鬼の六韜三略。日髪日風呂で絹布包着み、未た其の上にキレノ水やら紅白粉、塗つて研いて粉装ろうこ、一こ皮剥れば姿は同じ野末の裸山、熊が棲やら狐やら、ではあるもの、然し誰しも其の骨かくす皮にばかり迷ひ勝ち、で矢張り此の延藏も何日しか妖魔の手に係り、一こ度鋒を交情ふるや彼等は其の獨特の長所たる、薙刀酸漿をギウギウこ揮つて水車の如く、輪る舌戦生殺自在の妙を得て、お突こ参れば胴巻を覗はれ、足を拂へばゲタゲタこ笑ひ、在りこ所
有手段を以つて或は日文矢文の遠攻を試み、時には車を駈つて我が本城を襲ひ、肉迫して烟管を捻り灰吹を打き

煙烟座中に漲り、爲に精神は作用を失ひ涎は流れて泉の如く、費用は嵩んぞ山の如し、斯の如き千變萬化の怪腕を振はれ、可憐や遂に捕虜となり血は吸はれ骨は抜かれて有頂天外。
で爾來妖魔等の下に操縦せられて訓練を受、艶語から愛嬌眼遣きから動作、其の他虚偽と事實の調劑法から虚涙の遣ひ別に到るまで、何くれとあく仕込まれたんたから堪らない、でなくとも浮薄の延藏、宛然虎に翼か但しは沃土に肥料を施せしも同然、忽にして手腕は頭角を擡げて免許以上の技倆となり、所謂口も八長手も八長。
で凡事物、蜜を貯蓄へる峰には螫を匿はせ、花叢郁き蓄薇には刺あるこ一般、即ち此の延藏もそれと同然、で其

の馥郁の代りとして陽に温厚篤實を假装し、陰には邪知
奸佞を以つて其の刺たる三寸の舌頭を使役するんたもの、
所謂大名育たる養父立の丞、お嬢様成育の阿花、何じや
う以つて堪るべき、宛然大神樂の手に懸りし球か、或は
掌中にせられし團子も同然、籠絡するのは露の乾ぬ間の
朝餐前と云ふ有体。
そ一言の世辭は以つて妻の阿花を歡泣せしめ、一編の解
剖學の講釋は以つて養父が財囊の紐を緩め、依つて以つ
て一は學費の支出に供し、一は以つて魔窟に妖怪の笑顔
を眺め、稀には酒氣未だ退かざるの身を以つて、大膽に
も大學の講堂を穢した事もあつた、が併し其處がそれ今
も言ふ僕の長所たる巧言令色の作用が大いに功を奏し、僕

伴にして退校を命ずこの災厄にも罹らず、デモながらに
もせよ兎に角學士の肩書領つた以上は、其の地金の銅こ
鐵との如何を問はず、當世流行の金ぶら學士で白痴威し、
なんと君随分な不徳漢ではあるまいか。
西野「なる程其れや剛い宜くもないが、然し君、春い
た米にも粗があり、新らしい疊でも叩けば埃が飛び出す
も同然、今日本四千餘萬の民あり、雖もイザ洗濯と云ふ
段になつて見給へ、多少道德の罪人たらざるもの幾人か
ある、然るを君、些々たる事情を苦に惱んで此の生存競
争の世の中にサ、依ト昆埵兒的に陥入るなんて餘り氣の
利かん話じやないか、シヤないつて、けれど君の語中
に適々不穩の形勢が現えてサ、天氣豫報じやあいが怎も

君の沿岸は警戒が解けんて、ハ、ハ、ハ、ハ。
横江「イヤ君、此の延藏前段述る所の如き微々たる事
情ぐらいでは、何の苦惱煩悶して泣つたり顛んたりする
もんか、右に左く今迄の物語りは未だ僅の手繕きで、書
籍ならば序文、席亭なら前座も同然、以後章を重ね順を
追ひ而して其の真打に到て見給へ、増々凄然たる悲惨の
歴史は現出れ来り、遠の君等も萬感胸に逼り魂飛んで情
躍り、知らず膝を乗り出して或は我輩の胸櫓を擱るやも
計れんぜ、なあに豈夫つて君眞實たよ。

(八)

毒多き毒の中にも氣の毒は何より毒なものでこそあれ、ど
は俚歌俗謡も頗る旨い急處を穿たもので、殆んど感服す
るの他はない子エ、どころで一こつ考へて見ると、普通
の氣の毒ですが不徳の極たご云ふのに、此の延藏の行爲
などを對照してみれば、氣の毒や蟲の毒は疾に通り越して、
實に残の残たる酷の酷たる其の又極とも謂つべきもので、
今悔悟の上は口にするさへも忌嫌しきくらい、でまづ君
等も前車の顛覆るを鑒て後車を戒むの徹を履行してもらい
たい子エ。
でまづ物も言ひ様ではあるが、人は正直と斯う言へば至
極外聞が宜いようなもの、然しまた正直にも因りきり
で、僕も正直は正直だが所謂デモと性を冠せざるを得ざ

るの正直、其の養子となつて出京して以來、養父より供給せらるゝ所の學費が、實父に依つて濟生學舎に學んだ當時は、宛然五石二人扶持の足輕が急に百石領りの侍士に一足飛びをなしたるも同然、此れ他ならず正に養父の恩惠と眞に難有く感じ、でまた卒業證書を握つて以來の感にあつては、生者必滅この一節は最も嫌ふ所であつたが、其の第二に於ける會者定離と云ふ御難には、よし遭遇するにもせよ眼前元の鞘へなんて媒介人に御苦勞をかけ、女々しき振舞はなさずとも何様か斯うか世の中はお茶を濁して通れよう、斯う云ふ慮見であつたのである、が併し此れも所謂正直の中には相違あるまい。ところで此の正反對の正直がする事爲事の行動といつた

ら、恰も朝に吳客に接し夕に越人に對し、反覆表裏定めなき女郎も同然にして實に人道の大惡魔、て矢張り僕の胸中に鎮座ましますは此の惡魔なので、養父立之丞の如きも此の惡魔に魅られたから堪らぬ、俗に所謂踏臺男に當選されたのである。で其の踏臺も高い所へ手を及ぼす迄は至極好都合で珍重されるようなもの、用が辨じた後はおさらばでは随分氣の毒ではあるまいか、此の延藏は恰度其の通りの仕打サ、で卒業證を領るや意氣揚々として歸省し、針小棒大的の甘言を以つて吹いて吹いて噴きまくり、面眩はせて莫大の資金を作らせ、伊那町に地を下して醫院の建築に取り係らせ、而して僕は醫療器械購入として上京し、此

の懐中暖かきの機逸すべからずと、大いにハイカラーを
氣取つて其の主眼たる器械の買入は扱て置き、先づ第一
着手として兼て知る鳥森の魔窟に白鬼の征伐を試み、櫻
桃梅李の間に奮撃突進したるの決果、其の功空からす目
指敵とし虜つた、と思ひの外虜られたのが即ち彼の島子
なのである、彼奴は飜風覆雨とも云ふべき妖術を以つて、
然も肝膽相照し意氣相投じたるの容姿を假装し、馴親手
段を取つて今日は伊香保に明日は芝浦と嚙へ廻し、子エ
貴郎の甘言を以つて其の資金の大半を甜られ、揚句の果
は交通機關たる鐵線に虚言を言はせての電報爲替、何つ
て漸く器械を購入、で歸國して開業したのは二十九年の
晩秋であつた。

で爾來養父と妻の姉なる阿里とは矢張り元の春野村にと
の儘、僕は妻と下女一人で醫院の別居で、患者も田舎相
應にあつて目の上の瘤もなく、家内安全唯我獨尊で消光
て居る間、多淫多情なる僕は疊と女房の原則、オット原
則と謂ちや些と無理ではあるが、まあ俗に新らしもの好
嗜と言ふ小人根性を起し、あろう事か婢女の容姿豈更な
らざるに眼を着け、機を見て淨々無垢の操を槍先に向け
て弄弄し、宛として臆面もなくとんだ桃櫻を氣取つて自
若たることは、所謂然り而しての儒者下女へ這も全然。
西野「オイ頼むぜ頼むぜ、些少お手柔かに願いたい子
エ、デモ眞實なつて君、其れや僕あそは痛痒敢て感ぜざ
るにもせよサ、兎に角竹林君はじめ居並ぶ御連中は皆人

獨身だから、餘り聞かしちや可憐そうじやないか、先づ如何に負ても正に鮓飯以上の價値はあるぜ、ハ、ハ、ハ、たが併し其の當時に於ける御愉快の程度は嘸たつたらうよ、恨むらくは洋三郎今日に到る未だ其の甘味を知らずサ、

横江「知らなんで結構々々、また君此麼非倫非道の甘味を知つたが最後、其れこそ落れば同じ溪川の泥鮓で此の延藏も同様百事休矣て徒に汚名を千歳に残すのみにして何の得る所かある、先づ人生最も慎むべきは情慾にありサ所て未だ君、僕は此他にも容易あらざる悲惨の獸慾を犯した事がある、エ、つて其様に乗り出さなんでも宜いよ。と言ふのは翌三十年の睦月、春野村なる妻の姉が年頭旁

々遊びに來られて、左様さ何でも十日餘りも滞泊つて居つたらうか、其の間に在つて一日僕は近隣の知己數名を招き、新年宴會と云つた所で、なんせ田舎の事だから眞の酒ばかりの間に合せ、ところで幸ひ來合せて居つた姉の里子が、多少糸道の心得あると云ふ事は、兼々耳にして居つたので恰も宜し好機會と、強て辭むを無理に引き立て、座輿に供せしに、寡婦とこそ云へ未だ三十と折るには一と歳の存するあり、殊に色白にして面長の顔に綠なす黒髪の遅れ毛二た筋三筋、振りかゝりたる横顔を爛々たる燈火の火影斜目に射るを見れば、其の昔二八桃李の花開きし頃の儘はれて、行儀作法は云はずもがな、萬事の執成し静やかにして懐しさを表し、なる程遠は武士

の娘じやと感じたまでは至極上出来、けれども其れに引
 き續いて起つた料簡が恐ろしい、と云ふのは常盤御前を
 相見て清盛が起したる感念も同然、兎に角あれだけの容
 貌を具ちながら、古昔堅氣に貞婦は二夫に會見えず、な
 んて彼の天下無類の年増盛を、あはれ深山の姥櫻として
 彼の儘朽果させ、落葉諸共土にしたでは宛然金鉛混交も
 同然、實に冥利に反いた次第、とはまたなんたる冥利た
 ろうか。
 で其の晚宴既に頽れて衆皆散じ、四顧寂寞として軒の聲
 幽かなる三更の頃はい、我は未だ寢もやらずして醉眼朦
 朧ながらも、微幽けく残る長夜燈の明りを的に彼れが寢
 所を襲ひ、在りと所有技倆を振ひ、遂に迫つて否や諾な

しに注射を施しぬ。
 西野「注射もかいもんたよ、君も仲々頽る非常た子エ、
 益々出て益々妙、と言ひたいが益々醜たりたよハ、ア、で
 其れから何麼した子。
 横江「所が妙なもんで、誰しも在る事濡ぬ先こそ露を
 も厭へで、右に左く十三年餘りの其の間、赤き心に墨染
 着せて男猫でも懐かざりし里子、豈計らんや爾來は時適
 彼れより我を訪なふて、妻花子の目を忍びつゝ、其の儘黙
 行を繼續し、宛と澄して好男子艶福多しと含笑しは、テ
 モ何たる拂々たらう。

兎角浮世は色慾の二た股道、下戸であろうが上戸た
ろうが、此れや世間一般の通り道、せは在りながら僕の
酷さ、此れも何歟の因縁さてもいふものか、またく斯
う云ふ災厄が湧いて来た云ふのは何でも其の年の確三
月下旬頃であつたて、僕が或る外科患者に手術を施して
居つた際、華美やかな東京訛の婦人が支關へ診察を受に
来た、其の聲を影で聞く所が、什麼も何處かて聞いた様
な氣がするので、ハテナと思ひながら順次診察を経て愈
々其の番になるや、先づ先觸として入り来るはバイオレ
ット香水の薫り、て次に甲斐絹の裾の捌け宜くシユウシ
ユウの音を足に蹴出して入り来る、其の御本尊如何と見
替す途端、天窗下しに霹靂一聲オヤ貴郎。

此れ即ち器械購入として上京したるの當時、浮川に漁色
を試みて所謂木乃伊取的に了り、反對に彼女の爲に漁せ
らる、所となり、焼いて煮られて骨まで甜られたる、藝
名奴子の荒波阿島ならんとは。
意外意外實に意外、であるから何うしてマア一別以來
を聴もし譚りもしたかつたが、其處が其れ俗に云ふ粉糠
三合の手前、假例延藏千枚張りの面の皮を具ふるに雖も、
何處かの一隅に幾分か良心の破片存するに見へ、なんぼ
産儘の家内にもせよ、眼前爾う斯う踏付けにもならず、
殊に書生其他外聞のあるあり旁々、陰に手を掉り陽に容
體を聞き、或は視線を應用するなど、彼んな處を影から
覗いて居つたら頗る見物たつたらうよ、でも其の複雑な

る間に於いて、目下當所寒梅樓へ來り居る事、今宵來れ
詳細は其の際、どの事たけは目以つて此れを諷し、手も
つて此れを誘き、所謂以心傳心の作用で翻譯が出來たこ
云ふもの、で僕は終りに臨み一際聲を張り上げて曰くサ、
貴女が其の目暈のするに云ふのは、畢竟血行不順に原因
するんじゃないやが、然し大事たことはありませんから、別に
薬の必要もないくらいですが、兎にあれ水薬と散薬を各
二日分宛差上ましよう、養生ですつて、左様さ先づ此れ
も別段斯うツて云ふ事もないですが、可及的不消化物を
召食らんようにして、殊に氣を平和に保つが第一ですナ
ア、其れですか、爾れや受付の隣の窓の處へお出しにな
るに薬が渡りますから、左様なら、て拍子を合してホッ

ト一息。
假例にも言ふ、婦女の髪に依つて絆へる繩には狂へる大
象も繋ぎ止むるごやら、なる程左うたうて、先づ見渡
す所凡人色道に踏み迷つた以上は、概して一切夢中闇の
世の中にも云ふべき状態、で僕も其の間を脱したるの今
日に到り既往に遡つて鑒ると、萬般の行爲一ことして眞氣
の沙汰あるなし、先第一、彼の婢娟たる我妻、オット此
れは失敬々々、否彼の阿島も、豈夫これ程迄不信不義た
らんとは、テモ四年以來同棲の睦言が悉皆く偽りであり
しか、と思へば焼て粉にして服もうごも、迎も憤怒の溜
飲を下るには足ない、が併し其の當時は然らず、なんせ
一切夢中の折柄さて彼奴の一顰一笑は可く我を籠絡する

力を有し、殊に其の歸郷に際しての如き人力車を同じふして上野停車場に到り、特にプラットホームに出て窓外に卓立ち、汽車の搖ぎ出すまであの、もの、世話したる所作の如き、離る者は日々に疎遠きにもせよ偶適胸に浮みし彼が、計らざりき遇然の邂逅に來たから堪らない、其の日夕陽未だ西山に没せざるに同樓へ駈登り、衍の新參妓此座へご御託宣を下せし所、お生憎さま鑑札が未だ、ですが何知らない方じやなしお酌ぐらいは宜いでしよう、こはまた願つたり叶つたりも全然、因より此方の思ふ壺と待つ間程かく入り來り、デモまあ貴郎が此町は頼母しいわと涙二三滴、而して以前抱へられ居りし松廼屋の負債を償ひ下り、やれ嬉しや素人と喜びひしは眞の束の

間、折角洗ひし泥足を、またも襪こつて渉る浮川の流れ、此れも家政が苛責む不仕合せ、然し古巢へ再勤も朋輩の手前心恥しさに田舎稼ぎ、なんこ或は託ち或は歎き互酌低聲問ひつ語りつ、したる決果が焼木片に火、燃いて後四五日太名乗つて現れぬ。世の中は何が常やら今日あつて無きは飛岬の川瀬ごやらで、爾來彼女の如き浮世といふ砥石で研ぎ揚げたる、氷の如き其の舌頭に切り捲られ、夜晝なしの有頂天、と云ふ現状あので自然患者の取扱ひは粗末になる、であるから淋れて収入は減る、負債と遊蕩費は増殖る、實家なる兄の不可藏と媒介者の黒原は間がな隙がな強請に來る、ごころへ養父立之丞は病氣となり、無人なる春野村では

萬事に不都合たごとて引き拂つて轉け込む、と云ふ次第の所へこんな災難、否災難じやない當然ではあるが、蒔かぬ種は生へぬと云ふ譬への如く、蒔いた種は慥に生へて、寡婦であらうが箱入娘であらうが、將また乞食にもまれ金満家にまれ、造物者其のものは敢て寸毫の容赦はない、發育此れ専門ごとてズンズンお腹を膨脹せしめ、袖もて隠せようご隠せまいご、或は其の結果身を犠牲にして土左衛門にならうごも頓着はない、そ矢張僕が妻の姉へ蒔付けた胚球も意外に發育よろしく、始めの間月が見へませんなんて云はれた其の當座は、何三十日たから無理はない、なご、駄洒落も出たもの、所が君、新月にならうが十五夜が來よが皆無形なしの皆既月蝕、サア事たと

思ふ間に息差は變調を來す、二重瞼で愛らしかりし眼が、奇に何たか瞿々ごして畏怖でも抱いて居るらしき鹽梅のみならず色艶は褪て蒼白を含、何時も美しかりし紅色の唇は血色を失てもの凄く、引き續いて肩で息を來たから最う堪らない、人の口に戸を閉ようごての轉地養療とはまた旨い考案ではあるまいか。

西野「旨い考案もないもんだよ、荒淫暴情もまた窮れりご謂へした子エ、モルモン宗も殆ど三舍を避るたらうよ、驚いた驚いた。

横江「否君、何も多情荒淫は僕の性來ごして別に驚く程の價値もないが、其れからたて、まあ聽給へ、で以後其の偶所へ折々出診してお手前ものの治療を加へた所

僥倖にして人の口の端には上らず終いではあつたもの、
其の決果ホステリ一症となつて頗る安穩ならず、或は怒
り或は笑ひ又は泣いて僕の獸行を口走るではないか、此れ
や堪らないこ、今更考へるに實に慘酷な次第ではあるが、
止むを得ず發狂と准擬へて座敷の監禁、してからなんて
も左様……十五六日目の晩であつたて、僕は例のメ
太の阿島の所へ宿直と出かけ、人目に懸るを恥らい東雲
の別れを惜まず歸つて見れば、斯は抑も如何にお里の部
屋は蛻の空床、で大騒ぎをはじめて搜索した結果が、裏
の井戸で死水、吞で死體は浮かんたもの、浮心瀬のな
き彼が往生、こは随分悲惨の極たろう。
所でまたある、抑々僕が阿里と畜生道の開鑿に取りか、

つたのは、畢竟こころ色と慾との遣い分けから計たもの
で、色は以つて残りの花の惜みを覗い、慾は以つて彼女
が藏する預金を狙い、で其の彼女の預金と云ふのは、先
刻も云ふ通り元彼お里は松島村の或る豪家へ嫁したるも、
母の阿秀が天刑病となつた、め、夫婦に厭も嫌かれもせ
ぬ間を、所謂涙を揮つて馬櫻を斬りしも全然、養老金と
して五百圓を貰つて離縁となり、それが悉皆銀行へ預入
てあつたが、此れは萬朝新聞に於ける精讀賞もごきに、
忽ち捜し當てるもの、見事に堀り出し、引出したる其の金
はメ太と巫山戯て酔醒の水となり了んぬ。

歡樂究まる所哀傷興るは、所謂盈れば虧る世の習慣のお
訛へ通りで、姉のお里が變死を遂て以來は一旦鎮まつ
た祖父曲左衛門が爲せる驚駭動の噂はまたも持揚り、其
ら見たここか因果は靚面、なご、後指差さる、様になつ
て患者はピツタリ、ご云ふような工合で自狂は増々募り
酒は浴る女は御座れで、宛然女護島に於ける湯蒸蛸の如
しさ。
デモ夫婦の情はまた格別なもので、阿花は養父の手前影
になり或は日向になつて隠匿たてしてくれるのに、其麼
深切は屁こも感はず、なに小癩な譬養子にもせよ戸主た
る以上は、竈の下の灰から椽の下の塵芥までも余がもの

ご假面を脱ぎて猫が虎の本相を顯し、霜枯れ行養父の病
状も眞準に見舞もせず、偶適妻が心配して父親の容躰を
問へば、何た馬鹿々々しい常例でも父様々々つて、木の
實で生育た仙人殿じゃアあるまいしヤツパリ米喰虫たも
のオ……、疚むごもあれば死ぬごもあるサ、ユリ
ヤ爾の親父はかしぢやない天が下一般の御定法、でまた
幾等世界が廣いにもしようが、順の目に死なけりやお後
世が支へるよ、それをお前、寝るにも父様起ても父様つ
て言つて壽命か延るぢやなし、側で焦き苛きするのは虚
假、デモ此れが普通の筈醫なら其處にもあるが、苟も學
士たる延藏の治療を辱なふと、で快愉なきや其りや天命
ゴホンゴホンも聞厭た、なんて言ひたい三味の熱を吐き、

絶る袂を掉り拂ひ鼻息荒く駈出して、太居たかこ寒梅
 樓、差向ひの寄せ鍋に珍々鳴の玉子酒、差しつ押へつ
 痴話言に、家の老毫が息を退いたら備も廢業てやろう、
 をんて始末であつたので、其の萬般の行爲自然素振に顯
 れて、流石産儘なる立之丞も此麼筈ではなかつた、今
 更かへらぬ取越苦勞が目際障つて遂其の年、可憐や無念
 の齒を喰ひしはり畢ぬ。
 嗟乎癩が取れたと、あろう事か七七四十九日の中陰も濟
 まぬ間、一割五歩に五歩手數、何かまはぬと所有財産を
 御朱印つきで三千圓、作つてから一と狂言、と云ふのは
 陽に臨時の謹身を假裝し、陰には取れた秋たご五百餘圓
 美事に拂つて、太の根引き、そゝ太のお島は人力車に乗

せて一と足先へ東京へ出立せ、妻の阿花は口車に騙て旨
 々と置去り、こはまた車にも種々。

西野「な……程酷い、驚いた。

横江「随分酷い仕打には憫れたらう、デモ君未だ惡
 運盡さりしとみへてサ、東京へ來てから間もなく君方の
 盡力で此家へ這入ようになり、お島は鍋町一番の大形で
 ズット女房を氣取、其の人情界を丸呑にしたる技倆を揮
 つて切つて切つて切り廻し、開業した處僥倖にも患者の
 氣受宜く、殆ど繁忙に苦む程の盛況を呈し、斯うしてま
 あ竹林君始め君等にも助手で頂戴く様になつたもの、
 彼れ阿花へ對しては今日まで殆ど四年の久しき、斷へて
 音信不通のみかは住所さへも秘して明さゝるの始末、て

彼が先祖代々傳はりたる財産は、動不動の別なく全部を
舉て担保に供し而して金を調達し來るに不關、利子はさ
て置き生活費とても鏗一文送りしにあらず、で此方は君
等も知らるゝ如く奢侈飽食櫻に劇場に將雪に、曾て一度
の逃したるなく、殊に彼お島とは所謂座布團的生活で
あつて、一にも二にも欲するに任せざるはなしと云ふ有
体、で春田お前は知つて居るたろうが、確一昨年暮で
あつたかしらんで、ゾラ彼の羽織破落漢体の奴が玄關へ
尋て來たのを、僕が早速奥へ通じて面談した事があつた
らう、あれが即ち阿島の親父なので、彼は芝新網の棟割
長屋に巢を構へ、三百もつかず壯士もつかず、所謂
曖昧な彼此屋を爲て居る荒波岩太郎と云ふ者で、其の妻

の阿浮と云ふのが鬼神のお松懷中に入るご夢見て、も胚
胎んたものか、稚兒のうちからオタンチン、で、常例も
同附近の井戸端會議では、肩揚ご父無子を一緒に卸すた
らうこの議決を與へられたごの評判、ごころが僥倖美ひ
面の皮被つたお影ご、險難ツかじながら糸道が少しく
解得つたのこ、生計困難ごの三因揃つたのが縁の端で、
最初淺草で公園藝妓の仲間入り、今晚はご突出されて爾
來茲に七年、遺練者たる親父の後見の下に操縦られ、風
向のまにまに市内十五區を股にかけ、浮世の風に腕を鍛
練へて人情界を丸呑になし、喰つて吸つて甜盡した其の
暁が旅稼、ごは此度來てから了解つたもの、でも別れ
られないと云ふのが、所謂宿世の因縁たろ、ご言つた

ら君等ははじめ讀者諸君も、定めし一途に鼻下長との斷案を下すたろうが、此れや決して然らずだ。マア右も左も厭を追つて聞いてくれたまへ、自然了解する節もある、こころで此れや枝葉に渉る話だから、元へ。

こして置いて先づ、抑々僕が彼女を一足先に親父の方へ遣しておき、僕が出京して訪問した際も、其の貧福の如何は兎に角としても、第一其の親父が一見到底交際へからざる猶奴と看破したので、あの、ものゝ、頗る莫大の無心を吹ツかけられしが、ペスト患者と診察して言ふが儘に出金した上交通遮断を施行した、然るに豈計らん未だ黴菌の伏在してあらんとは。

で其黴菌と云ふのは即ち、田舎に在りし當時寒梅樓上に

於いて深酌海鼠の如き際、お島のメ太が求むるに任せ、戲談まぎれに一つ返答で、夫婦諾すと走り書に印形ボツり、押捺て渡したそれなのである。

で春田の知つて居る時に來たのは其の件なので、畢竟彼奴の主眼とする所は黄金ではあるが、併し奸知に長たる彼の玄關横着に爾うは言はん、でまづ實は他の事ではありませんが、最う斯して御開業もなさつて一と極りお着になつて見ますれば、何かお島の籍も入て頂きたいと存じて伺ひましたので、イエ何御忙しければ私が手續は致しますから、なんて彼は僕の所へ入籍の出來ないことは百も承知二百も合點して居る癖に、奴彼此屋をして幾分か法律の欵片ぐらい喰嘴つて、居ので何お忙しければ俺

がなんて、それさなく重婚罪の構成をもするが如く微漏すので、奴小癪などは思へども、考へて見れば食人國の蠻人ですら我子は喰わないのに、然るを東洋の文明國を以つて誇る日本に籍を措ながら、眞の我が子を餌食にするなんて、否そう言ご自分は大會方正のようだが、時にマア手前の非行は棚へ上てとしてた、そ到底敵手にはなれない、と云ふことは先方でも讀で係つても居るから、先づ御馳走政器を採るが得策と、溜池の三洲亭へ送り込み僕も一と足後れて馳參じ狸爺と貉の延藏臺を挟んで差向い、合酌は互の胸に藏めて腕くらべ。神變不思議なる猾狸の手腕ハ、其の鬼を出すやら佛やら其は啄黃の貉子確と量り知る處にはあらされども、常住

座臥造次顛沛歸する所は黄金の一點で、昨日の敵は今日、此味方と云ふ世の中、集合離散は只雲行次第と多寡を括り、速く本音を吹かせんと頻りに正宗を浴せかけ、受つ流しつの大談判に時を選し、夜は沈々として酒漸く冷羹凍ゆる頃に至り、止の詰りが走り書の内容即金五百圓の年賦が千兩、なんど頗る高價ではあるまいか。西野「醫師を止て寧書家になれば可ひじや無か、鐵舟や象山が素足で逃るぜハ、ア、マガ然し随分じや無か、横江「ム、随分た、随分だけごも抑た針で仕様がな

うなもんで、へエ剛う恥かしくもありませんから或は新聞の三面へ晒されまじやうとも、なんて上たり下たりの虚々實々云ふ現状、で縦んは左様事を行ないにした所で其際書付を掉り廻されては外聞も悪し、特に折角開業して賣出し眞最中ではあり旁々、寧の事面傾なしに買戻すが一の手こ、思つたけれども時に爾うは金が纏まらな

何日何時どういふ事が起ろうも限らないし、でまたお前も若いようでも最早満開り、葉が出る頃におサラバでは虻蜂取らず、なんて雑駁々々云ふもんですから、シヤア契約証と見せて其れなり失念たので、とは言ふものゝ當にはならず、爾來二人の間に牆壁はたてられぬ、ドラ茶を一

(十一)

凡社會萬般の事物、其の多くは矢張野に置け蓮華草で、恰も家の米の飯より他處の挽割飯といふも全然、で僕も最初目についた色香は次第に鼻につく様になり、我が胸中に於ける氣象臺の天氣豫報では、北の風曇り後暴風

雨の兆あり阿鳴身邊を警戒す。云ふ豫報なので、自然
貴重なる時日を面白く無く消光二夏二冬 けれども家計
の都合上未だ皆済にはならず、且又自分の身にも後日痛
こともあり、何やら欺やらで畢竟座布團的の生活を、知
りつゝ黙諾するの止むを得ざる境涯であつたのだ。
折も際として斯う云ふ有体の所へ、去年十月の十日頃であ
つたが、僕が往診に出かけての留主に、何處怎捜して來
たものか國元に置去りにして來た妻の阿花が、乞食に髣
髴たりと云ふ可憐な姿で、僕が蒔つけて置いた胚球が生
へて、親父はなくとも子は育立つて、最う一―二―三―
と中指を屈ように成つたのを背負つて、紅葉ばかり得色
然たる其の寒空に、色褪たる古單衣たつた一枚に身を纏

い、トボトボながら折角の事を尋ね當たのに、然もなく
も浮薄冷酷なる彼方、家内不和や維駭で自裂半分の際柄
とて、自狂と疝氣が一緒になつて滅茶苦茶に罵傾したと
はお島が僕への面當話し、聞いた際は最う遅く顛んた後
の杖であつた、と言ふのはマア此れを見てくれ給へど、
其の取出したる一通の封書の文は左の如くである。
一筆申残し、永々御目もじは仕らずは候
へども、御無事のみならずなかなか御盛のおん
くらし、定めし御満足のおん事ごぞんじ候
随つて妾ことも無事でこそあれ、病氣にも勝る
其苦勞拙なき筆もて言はせ申候間、ごうぞ一
通り御聽とり被下度候

指屈かぞへは四年前、且那樣にお別れ申す際も、
實は御一緒にお連れ被下ばは思ひ候へども、
常々人様が仰有にも、また且那のお話にも東京
と申處は非常に物價も高價く、殊更婦人連は足
もこを見らるゝなごご御伺い申居り候間、もし
足手纏になつては、實はさし控へ申居り、御出
立の後五六日頃よりは、今日は今日、毎日お
通信を御待申居り候も、梨子の礫の音沙汰なし
とは、若や郵便でも紛失つたのではあるまじか
とぞんじ、常例もの集配人にお問申候ても、其様
答はなしと被申、またも考へ直し候へば、直おい
それともゆくまじとも存じ、此は定めし何かと

御多用にて遷延に相成候はんご存じもし、或は
お疑ぐり申、又はお案じ申て取つ置いつお待
ち申居り候ひしも、其間お小使は無なる兼て宿
せし赤坊は生れるご云ふ如き有体にて自然賣
喰に致し居り候處、其の十一月山下村の高井様
が御越に相成先般お立替申た金の御返濟を願
ひたいなごご仰せられ候も、何が何やら一向分明
り不申候まゝ、兎に角且那樣よりお音信のある
までと申上候處、其様事は畢竟雲を宛たなごご、
申され候へごも併しお別れ申時、彼れ程までに
仰せ被下候ものが、豈夫と存じ、明暮お音信を一
日千秋の思で待ちわび申居り候處、其れより二

十日斗り後、相成突然執達吏を差向られ伊那町の病院は申に及はず春野村の宅迄も差押られ途方に暮れて春雨村の見上様の方へ御相談を願ひに伺ひ候も延蔵の事はとた力に成くれ不申又黒原さんも矢張り逃廻つてお隠れになり女一人の如何とも爲まようなきま、單に泣いてはッかり居り候處、またも強賣とやらで遂に追退られ往く處無之候ま、旦那の見上様の方へ参り五六日御厄介に相成候へ共お妻君には明暮筈の上げ下しにも人増せば水増すつて宜く言つたものなご、申されて其れさなくの邪覽もの扱ひも畢竟足手纏ひの子持の身の上

にて、お手助どては出来不申候故、お氣の毒でもありかたがたまたも權平爺の所へ厄介になり候へども、何を申も其の目稼の口雇の身の所に候へば深切に撫りくれは候もの、まことに氣の毒でへんべんご見ても居られず候ま、小供は權平爺の孫娘に負で貰ひ習ひもしない器械工女となり剛う世話にもならず、怎やら斯うやら小供にも時節の仕着せは仕り先月まで稼ぎながら何日か一度はお音信もご存じ居り候ところ松之助（此れは權平爺に名命でもらひました）も最う三歳の片言交りに、他處の父様を見て来ては何して家の父様はご聞かると

いぢらしさに、遂ほだされて幾程にも耐忍出來
不申候まゝ、ジイの頼に止むるをも聴かず四方や
搜して知れない事もあるまいと存じ今迄様ざ
貯たる金銭にて何やらかやらの仕度を致し、餘
りの金八圓七十錢を路金に宛て本月一日出立
仕り瀧車のある塩尻とやら云ふ所までジイに送つ
てむらい、次手ながら長野の善光寺様へ御參詣
致し、同所に一泊仕翌日二度目に發車瀧車へ乗
り、東京へ着ましたは午後八時半頃、相成り松
坂は泣荷は有り困つて居り候所へ四十ぐら
いの男の方が來つて深切に荷物を持つてあけまし
やうと云はるゝまゝに御願申候處問もなく姿

を見失ひ此れは大變と其處等此處等搜し候へ
ども慣ぬ土地とて遂分明らず仕方なしに斷念
めて廣小路とか云ふ所の宿に泊り翌日より七
日間足に任せて尋廻りをり候間僅の殘金も遣
い盡し、あられぬない話と聞き事ある木賃宿ま
で泊りあるま去ぬる十日赤坂とやら云所を尋
をり候處巡查の御方に怪しまれ御取調べを受
たが因で漸と分明つてやれ嬉しやと飛び立勇
んで伺候處案に相違の立派のお住宅此れぐら
いなのに何して居所をも打明被下候はすやと
存じながら玄關まで立寄り候處御留主とやら
で書生の方とお話申居り候ところへ出て來ま

百〇六
したのはあのあのあの寒梅樓に藝妓をして居
つたそれあのそれあのノ太とやらいふ藝妓が
丸鬚に結つて横江延藏の女房は何人もない此
の乞食めがとあるう事か妾を蹴たり踏だりの
末追出され申候あこは重復々々と申さす候へ
ども前々よりの事情よく御推量被下度候。
してまた斯う申上候ては失禮は候へども妾
も恥しなからも武士の娘よの候へば虚言偽
言を申てお捨にならずとも嫌諾なしにこは決
して申は候はず然るを泣かせ困らせ彷徨せ
では聊罪深過るかど存候。
次手ながらには候へども私は最う決して御目

には懸りませず行方も了りまふさす候間御安
心あつて彼の藝妓さんと行末永くおん添遂く
たされ度候。
また松之助は貴郎様のお種に有之候故せめて
これだけは貴郎のお傍に置かうかともさまざ
ま考へ候へども萬一また慈悲が反つて讐とな
るよりの事あり候てはと懸然ながら一緒に連
立ち申小につき左様御承知くたされたく候ま
づは取り急ぎ候ま、愚痴まじりの拙き文あら
く書き残し申候。

十月十三日

横江はな

横江延藏様

おん許へ

西野「な……………るほど極だ實に氣の毒の極だ、横江
 無理々々、實に可憐も亦究れりと云ふべしだ、全體また
 君が此様清淨なる節操を保つ細君を捨て、只慾の皮の美
 艶き五体を包むのみなる、言つちやあ失敬だが彼麼矢場
 女然たる女を探るとは實に怪からん次第トやないか、な
 んだこ、其れも因縁だつて、馬鹿を言へ麼其因縁がある
 ものか、でその行方は知れたか。
 横江「知れば知れたが新聞で知れたから最早跡の祭り
 暢氣な奴だつて君、決し左う云ふ譯ではあが、マア怒ら

ず聴たま、であれが阿島の奴めが直ぐに話せば或は
 救かつたかも知れないが、それを僕の知つたは手紙を握
 つてかものので、直さま乗廻してあらん限り搜索たが遂
 に及はず、十五日の拂曉新聞を手てして、眼を雑報に一
 轉せしむれば九日すぎの阿花でありき、即ち此れた、切
 り抜いて置いたから此れを見たま〇、ご取り出したる某
 新聞、雑報左の如し。

憐な母子の身投、昨日午前六時半頃新大橋下
 流に母子死體漂着し例益依つて警官出張檢視
 を遂をれたるが女は三十一二歳色白にして
 面長く紺白飛中古單衣を着しメリンスと縞
 子を袷せたる帯、膝手織綺の前掛をメ三才ら

の男の子を背負たる儘にして一見田舎者らし
きも所持品にては更になきため姓名を知るに
由なく可憐や年増さかりに愛嬌盛りの母子共
に區役所の手へこ引き渡りぬ。

西野「オヤ、では何故引取らんかつた、薄情な。

横江「ム、薄情に相違ない、だが併し有繋冷酷極まる
僕も、此れを見た際には胸躍り魂飛で五里霧中を彷徨し、
其の爲す所を知らずと云ふ現状で爾後心緒亂れて紛麻
の如く、愁然として此の一室に閉籠り苦惱煩悶晝夜を別
たず、從來に於ける一舉一動の行爲に付いて鑒みれば、
考一考心臓の呼動禁する能はず、爰に大いに觀念する所
あり、則ち名を精養に借り漂然去つて沼津に趣き、一意

専心社會萬般の事物に付き、因と果との講究に餘念なか
りし折柄、突如電報に接したのは亦も彼お島の不體裁で
ありき、こは世の中も四尺五寸になりは覺。

(十二)

佛語に言ふ因果應報とは、則ち言ふまでもなく積善の家
には餘慶あり、積悪の家には餘殃ありで、僕も這度種々
な出來事に付て熟々考へて觀るに其の顯著なるには實に
驚く子エ、で今死靈があるの生靈があるのと言へば、何
馬鹿と一言の下に排斥するの輩が多い、がしかし僕は斷
じて有と確答するに躊躇しない、と言つて何も芝居的に

ドロドロと現て來る譯ではないが、畢竟死靈なるものは我が五體を支配する我が神經に馮着き、我が體内に伏在し、而して際適出現するのた、て自身から現るのたから怖くないか云へば、所がなか／＼決して然らず、せよしんば假に有形の幽靈なるものあり、突然襲ひ來つて喰殺或は斃殺するにもせよ、爾は利刀を揮つて兩斷せらるゝも全然、苦悶は少時の間にあり、て我体内に棲息するのは然うでない、出たい時に現て窘めたい際に苦め、宛然三莊太夫の刑せられたる竹鉦引の弄り殺しも全然、夜もなく晝もなく敢て間斷なしの攻折檻、眠れば夢もて妖魔に斃され、覺れば草木また幽鬼の如し、此は延藏經驗上の實話であるから諸君も特に念入れにお聽を願ひたい。

先づ前々よりのお話の如くにして、所謂道德の殺人、であるから僕の爲に命を殞し或は災厄を蒙たもの、死靈や生靈は寸時も僕の身邊を離去れない、と言ふの證明はまづ君等にせよ讀者諸君にもせよ、假に自身に或缺點あるを看做し、無意思に或る往來を通行せんとするに、傍に我が缺點と髣髴たる話を耳にすれば、ハテ僕の批評かしらと感ずると一般、で清淨無垢なる君等には、天然美妙の音楽と聞ゆる松風が巧に合奏するサハ／＼たる音も、僕には吃驚胸躍つて無造作に幽靈を畫き出し、長夜燈の燈火細くして白き窓掛に映る我が影法師を見ては阿花と叫び、遊星の通過するを見れば、親父知らずの子宇宙に彷徨ふかと感じ、下弦の月に依つて椽なる葉蘭を障

小 説 死 靈 生 靈

子に映すを見れば、姉お里が怒れる髪の手筋八千筋の亂
 しかと誤認し、で或る時の如きは、現に此處に居る春子
 さんであるが、僕の眼を損ぜざらんようにと看護服を付
 けたる儘しこやかに来りし際の如き、恰も眼の覺るに會
 し此れや大變まさに正物と、已に枕を手に持たる事もあ
 つた、で最早斯うなつたが最後増々變調を呈し、妄想を
 逞しふしては恐怖の念が湧き、遂には一頭五錢の鼠を
 が此の五尺の體を吃驚つかせる、何可笑かない全たよ。
 でまた生靈であるが、此れも一寸引例て見よう、先づ此
 處に一人の強盜ありとせよ、彼れ押入つて家人を強迫し
 旨々財を奪つて僥倖に逃延るに雖も、爾後天下の大道
 を活歩するを得ず、よし潜に歩を試むるにもせよ、何處

因 果 報 應

にてか被害者に邂逅はすまじきか、少く容姿の變りし
 人を見れば、彼人は警官ではあからうか、なご、思つて
 神經を安堵に保つ寸暇もあるまじ、此れ即ち生靈に馮付
 れたるにあらずや、でまづ此れや人間外として、爰に甲な
 るもの乙に金圓を貸たるも信用にして證書を取らず、乙
 は奸者にして奇貨措べからずと此れを踏頭し、仕て爲つ
 たりと得々たるも、甲の生靈は何時も乙の神經に纏ひ、
 途に甲を見れば道を遁け、或は用事に際し甲の表を行は
 近きにもせよ、態々迂廻するの止むを得ざるが如き、此
 れみな生靈の他ならず、生靈愈々募れば遂には世界廣し
 と雖も、五尺の體を容るゝ空地あるなし、實に恐るべき
 ではないか。

僕が先刻から因縁々々と言ふつて西野君は笑はれたが、
 マア見たまへ、僕の養家の祖父が養父立之丞の爲に、無
 惨にも或る一家族五人を惨殺せし以來、横江家に於ける
 災殃を見たまへ、僕の養子たらざる前の三人も皆變死、
 養子となつてから養父は僕の爲に虐待せられて無念の最
 後、のみならず財産は蕩盡され、姉妹も亦畢竟する所僕
 の手に懸つて敢なき變死、此れ抑々僕が黒原に偶然會つ
 たるが因で、先方で貰つたが縁、而して横江家終に斷絶
 こそは、單に此れ偶然と云へないではあるまいか、僕頃日
 來病床ながら古來の實録に徴し、或は社會の事物に鑒み
 特に横江一家の事情に據るも、此れ魂魄流轉輪廻して係
 る因縁を作り、遂に事茲に到らしめたるものと斷定する

の他なし、天の配劑また奇なりと謂へした子エ、まづ諸
 君も前車の顛覆するを見て後車を警むの例に慣たまへ、
 僕も斯うして明晰と懺悔してみれば、最う心にかゝる雲
 もなく、闇の中から江風霽月の地へ一足飛も全然と云ふ
 有状になつたよ、さて最う千秋樂として寝もう。
 其の翌日萬全堂醫院は車の出入其他非常な雑沓であつた
 が、それは患者ではなく、院主醫學士横江延藏がモルヒ
 子自殺を遂たご云ふことである、で臨檢の際發見したる
 西野其他へ宛たる書置、及び遺言狀の文意に基き、其の
 財産の全部を競賣に附して精算を遂たるの後、折半は遺
 念として代診竹林以下女中に至る迄應分の分配を受け、
 其の一半は菩提所と孤兒院とへ密送したるこの事。

百十八
灰微に傳聞る、荒波阿島は目下藝に身を助られて、東海道筋を門附で彷徨つて居るとの事、噫。

小説死靈と生靈終

明治卅六年十二月十八日印刷
明治卅六年十二月廿一日發行

(定價金二十五錢)

不許
複製

著者 東京市淺草區左衛門町一番地
發行所 丸山三津平

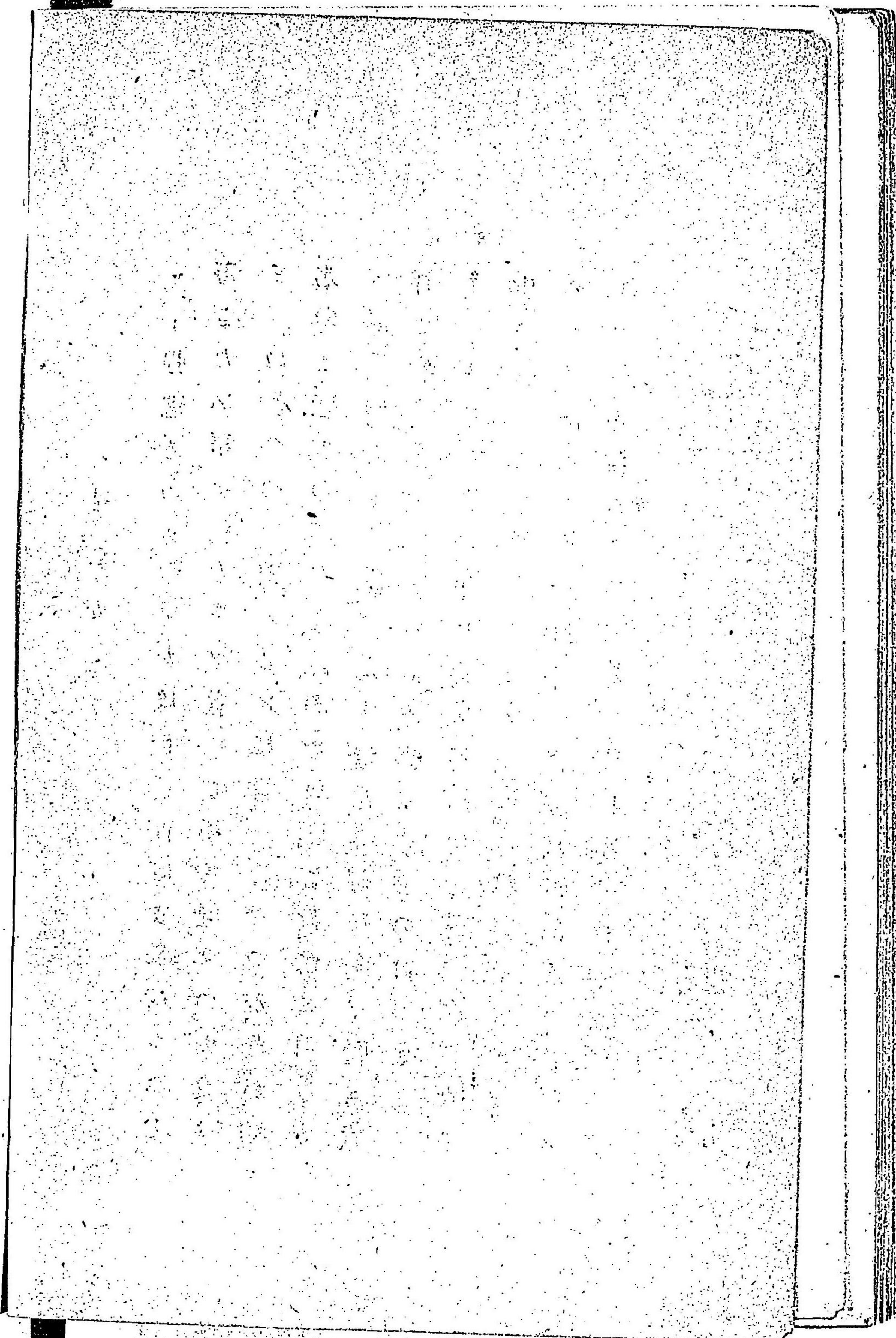
印刷者 東京市淺草區藏前片町十番地
塚國太郎

印刷所 東京淺草區藏前賀片町十番地
藏前活版所

發行所

東京市淺草區左衛門町一番地

博愛社



東坡先生
藏書

特72

119

301661-001-0

特72-119

小説死霊と生霊

丸山三津平

M36.12

DBQ-0001

